

ぜんざいどうじ 善財童子の求道

2001年6月30日 岡本英夫先生

今回は善財童子という少年の求道のお話です。このお話は、お釈迦様が悟りを開かれたごく初期に説かれた教えだと言われている『^{けごんきょう}華嚴経』という經典の中に出てきます。『^{けごんきょう}華嚴経』は全体が大きく二部に分かれていて、前半の方は論理的な教え、後半の方はその説かれた教えを善財童子が師を求め、様々な教えを尋ねていく求道の旅という構成になっています。そのようなかたちで、仏教の教え全体、或いは、お釈迦さまの覚られた世界というものを具体的に現わしていこうということのようです。

善財童子は初めに、^{もんじゅぼさつ}文殊菩薩という方にお会いして仏法の教えを聞き、大変な感銘を受けます。次なる先生（^{ぜんちしき}善知識）を文殊菩薩に紹介してもらい、それから次から次へと先生を尋ね、結局五十三人の先生から教えを受けていくという物語りです。そこには求道、つまり道を求めていく上で、大変大事なことがたくさん言われているようで、その中から少しだけですが、見てまいりたいと思います。

一 童子・・・求道精神

善財童子とは何であるか。名前のところから見ていきましょう。まず童子ですが、童子の童は「わらべ」ですから、子供という意味合いです。この童は、道を求める「道」に通じるとも言われます。「童魂は道魂である」という言葉もあります。単に年齢上の子供の魂とか精神というのでなく、本当に素直に、率直に道を求めて行く、真実を求めて行く、そのような童魂、若き求道精神ですね。だんだん年を取っていくと素直さというのが無くなって、要領よく、ずるくなっていきやすいかもしれません。そうではなく本当に素直に自己の全体を挙げて求めるべきものを求めていく。それが道を求める精神であると。

その道を求めるということなんですが、何回か前に八相成道のお話をしました。その時に出家相、つまりお釈迦様の出家ということがありましたね。お釈迦様が提起されている非常に大きな問題は、その生涯において出家をなさったというこ

とです。

お釈迦様が出家しそうなを見て、父親はいろいろな世間的な楽しみをどんどん与えようとしたと言われていました。しかしお釈迦様は、そのようなものに触れれば触れる程、この世間の中に潜んでいる真実の無さを知って、遂にある時、出家しようと決心します。可愛がっていた馬に乗って、馭者を一人連れて出ていくわけです。

そして最後の別れの時に、馬も自分が着ていた服も装飾品等も全て馭者（馬車の前の席に乗って、馬車を走らせる人）に与えて、つまり自分の持っているものを全て捨てて出家された。目指すは真実、本当の救いなんですね。

出家の「家」は世間を表わすんですね。だから出家とは、世間から出るということです。世間を生きる心を世間心と言いますが、何といたってもこれは名利心ですね。私達の名利心は大変な深さ、強さをもっています。名利心を一番自分の深い心としてこの世間を生きていく、その生き方によって出来上がっているのがいわゆる世間という世界、一人一人の名利心が、この世間を作り出しているわけです。その世間という家から出るということは、自分の名利心を超えるということなんですね。即ち自己自身を出るということになります。そういう大変なことをやろうとするのが、出家するということの意味ですね。

そのような出家の歩み、道を求めていく歩みをする時に、どうしてもなくてはならないもの、それが善知識という存在なんです。普通の言葉で言えば先生、師です。善知識という言葉は、私自身のことをよく知ってくれて、適切な指導をし、教えを説いてくれるという意味合いがあると思います。名利心を超え、真実を求めて歩むという新たな生き方をしようとする時には、善知識が必要なんですね。善財童子も五十三人というたいへん沢山の善知識に会い、教えを聞き、その教えにしたがって道を求めて行きました。

我々の世間では、仮に自分を師と仰いでやってくる人がいればよく来たと言われ歓迎し、ここに留まって他所へ行くなと言うのはよくある話でしょう。自分の世界の中にやって来た人を弟子としていつまでも置いておきたいという、それも正に名利心でしょうね。ところがこの五十三人の善知識は皆、そういうことをされないうんです。童子が尋ねてくるのを受け入れ、そして、自分は何もかも全部知って

いるのではなく、この事一つだけなら知っているんだと、それを教え、そして次なる善知識を紹介するんですね。道を求めている人を受け入れ、自分のできる範囲内で何等かの教えを説いて、自分のところに留めず、さらに歩ませるといふ、たいへん素晴らしい五十三人の善知識なんですね。そのことが道を求める人に対する対応の仕方だと、そのようなことも言われているかと思います。

善知識を尋ねて、聞法、求道の旅を続けていく時に問題になってくるのがいくつかあります。声聞^{しょうもん}や縁覚^{えんがく}という言葉で表わされたりするものです。このどちらかに陥りやすいということがあるんですね。本来の歩みというものは、教えに触れ、それを縁にしバネにして、どんどん進んでいくということなんでしょうけれども、この声聞、縁覚はそれとは違うようです。

声聞^{しょうもん}は、善知識の説かれる教えをたいへん大事にし、その教えを熱心に聞いていくけれども、教えを聞くというところに留まってしまって、教えによって自分自身がさらに歩む、その教えを踏み台にしてさらに一步飛躍して、自分の道を進んでいくということが弱い、それが欠点というか特徴なんですね。教えを大事にして聞いていく姿勢は非常に結構だけれども、自分の道をさらに進んでいこうというところが弱い。これは致命的な問題ですね。

それに対して縁覚^{えんがく}というのは、善知識を通してというよりも、自分自身で考えてやっていこうとします。覚りの世界とはこういうものだ、真実とはこういうものだと、自分で考えた道を行こうとします。しかし、自分で考えた真実の世界というのは、まず間違っていますから、間違った方向へ行ってしまうということになります。縁覚は、声聞に欠けている自分で歩み切り開いていく姿勢に溢^{あふ}れているけれども、方向を間違ってしまう。これは大きな問題ですね。

声聞と縁覚、一方の長所が一方の欠点、どちらかに傾きやすい。これが私達が道を求めていく時の陥りやすい点ではないかと思います。善知識に会って、生涯その教えを聞きぬいて、そして自分の足で歩いていくということが大事で、善財童子はそういう点では本当に両面備わっているような童子です。

二 善財・・・宿善

さて次に善財ということですが、これは固有名詞で童子の名前ですね。善と財に意味があると言われます。善財ということを一語で言い換えますと、宿善しゆくぜんという言葉が一番近いのではないかと思います。自分の祖先、両親、二代前、三代前の人達が仏教の教えを大事に聞いてきた、その雰囲気の中で生まれ育っていくと、知らず知らずのうちにその雰囲気を吸収していくわけです。ですから、たとえば青年期になって、仏教が目の前に現われてきた時に、「これだ！」という思いが起りやすいことは十分にありえますね。将来仏法を聞いていくそのための大きな素地になるもの、それが宿善と言われます。

善財を善と財とに分けて考えてみましょう。ずっと昔から祖先が続いてきて、そして私が生まれ私の一生が始まるわけです。善なる祖先の歩みであったが故に私の歩みが生まれた。祖先の人達が一生懸命、真剣に道を求めて歩んできた、そのことの全体が私のところで実を結び、そして私という人間も又、道を求めていこうということになる。私の人生が終れば、次なる人にとって私もまた同じように祖先になるわけです。

私達は祖先といってもよく分からないかもしれません。私は私の祖父もよく知らないぐらいですから。しかし両親の又両親のその又両親と、だんだん遡っていったらどうでしょう。二十代前まで遡ったら二百万人ぐらいになるんだそうです。二百万人と言ったら、もう殆ど私たちは皆親戚ですね。そういう沢山の人達が真実を何等かの形で求めて歩んだ、そういう真剣な歩みが次々に伝えられ、そして今、自分が生きているんだということ、それが善財という意味なんでしょう。

亀井勝一郎という人の文章の中に、「人は祭壇の前に立つ」という趣旨の言葉があったかと思えます。祭壇というのは、象徴的に言ってるんですね。祭壇があってその前に私が立つんだと。祭壇とは何かと言え、祖先全体を表わしているんですね。私は、これまで嘗々とした祖先による歩み、為されてきたその全体の前に立つ存在なんだと。即ち私は祖先の先端、歴史の先端にいるわけで、その祖先の願いを今、自分が引き受けて歩いていくんだと、こういう意味合いがあるわけでしょう。

祖先というのはしかしどこか抽象的で分かりにくいんですが、分かりやすいのは自分の親だと思えますね。私の場合は、両親はもう亡くなっていますが、父が

亡くなって十五年、母が亡くなって五年ほどになります。生きている間は、ほとんど思わなかったんですが、亡くなってから親の存在意味というものを少しずつ知らされ、親というのは物凄^{ものすご}い力を持っているという感じがします。私も三人の子供の親なんですが、その子供は親が文字通り生み出したわけです。ですから親子の関係というのは、何とも言い難い、物凄く深い関係があります。それこそ無から有を生じたようなもんですから、その子がどうなるかというその全責任はまさしく親にあるわけです。

子供に対する親の思いと言え、難しいことですが、この世に生まれてどうかあなたの生涯を全うしてもらいたい、本当に生まれてよかったと言えるようになってもらいたいということでしょうか。親は子供に対して必ずそういう願いを持つ、普通はそうだと思います。だからその願いを子供の自分が実際に感じて、受け止めていかないといけないということがあるわけですね。

初めの間は親はいてもいなくていいような、むしろいない方がいいような感じなのでしょうが、だんだんと親の存在を考えるようになりますね。親という存在は非常に具体的な存在なんですね。自分はその親によってこの世に誕生せしめられて、さてそれでどうするか。生む親の願いと、生まれた自分の願いというか、そういうものがあるわけです。親という位置にある限り、子供に対して当然起るといふか、ある意味で自然というか深い思いが起ります。親の願いを受け止めて、自分の人生を全うじていかなくてはいけないという思いが、子供の方にもだんだん強くなっていくのでしょうか。祖先一般というのは顔も知らないし分かりにくいけれども、親はその点よく分かる。祖先の営々たる営み、それによって私の上に道を求めて歩んで生きる姿勢が生まれたと、このような意味合いで善財と言われるんですね。

少し狭い意味で言いますと、今度は私自身においてなんですが、親や祖先から道を求める精神を賜って生まれた私が、今度は私自身の努力というか、私自身の意識的な歩みを通して、その賜わった求道の精神を開花していく。それが今度は私自身の善なる歩みとなる。かつて祖先がしたように、私自身も又その財を賜って、財のところまで甘んずるのでなくて、それを基にしていよいよ私自身が歩いていく。それで善財というといわれます。そういう意味合いで言えば、私達は皆、善

財童子として生まれているんだということだと思っうんですね。

三 文殊菩薩^{もんじゅぼさつ}・・・出発点の教え

さて、善財童子は五十三人の善知識を次々に尋ねていきます。一番最初に文殊菩薩という方にお会いをします。この方の教えを聞いて童子は大きな感銘を持つわけです。その教えはごく簡単には申しますと、人と生まれて私達は何をしていくのが大事なことなのかという教えですね。

「(1) 広大な心を^{おこ}発す。」このことが大事なんだと先ず言われます。

「(2) 仏を敬い供養する。」供養というのは一応形の上では香を^た焚いたり、お華を上げたりしますけれど、基本は私自身をそのように^{しょうごん}荘嚴された仏の世界を歩む仏道に供養する、私自身を仏道に投げ出していく、それが供養なんですね。お華をあげたり香を焚いたりして、そのことを表わすわけです。私という人間は真実を求めていく道を歩んでまいります、生涯をあげて歩いていきますということを示すのが、仏に供養するということかと思ひます。

「(3) 仏の教えを求める。」仏法の教えを聞いていくということですね。

「(4) 菩薩の行を行ずる。」菩薩というのは求道者で、真実を求めて歩む人のことです。その菩薩が本来為していかなければいけない様々な行を自らも行じていくと。布施、持戒、忍辱、精進、禅定、智慧、この六波羅蜜を行じていくわけです。

「(5) 菩薩の精神を体得する。」深い深い菩薩の心、自らどこまでも真実を求め、どこまでも人々にはたらきかけていこうという願い、を、我が内にはっきりと立てていくと。

「(6) 流転して後悔しないこと。」流転というのは迷いの中をグルグルと回ってそこから出る事ができない生き方です。そのように生きている人々にはたらきかけ、従って自らも流転をしていくことになる。そのような一生を送ることになっても最後まで後悔をしないと。

「(7) 仏の国をつくりあげる。」これはなかなか大きなことですね。仏が中心になって万事が営まれている世界です。仏法に生きることが各自の根源的生き方になっている者同士の世界ですね。国と言っても、大きなものでなくてもいいわ

けでしょう。ある所に三人なり五人なりの僅^{わず}かな者が、仏法を中心にして集まるような場ですね。何によってその社会が一番基本のところから作られているかが問題です。普通でしたら、法律とか文化・社会習慣・人間的^{きずな}絆、そのようなものが一番根底にあるでしょうね。しかし仏の国とは仏教の教えが一番基本になって統治されている国です。そのような場、世界をつくりあげていくと。

「(8)人々を教化し導く。」私達は善知識や様々な方々から導かれ教えられて、遂に道を求めていくことができるようになる。たいへんなお手数をおかけし導かれた私なんですね。ですから今度はその私が、次なる人に何らかの形で仏教を伝えていく、これを順繰りにやっていくわけなんです。人によって教えられた私が、次なる人のことを考えずに自分のところで歩みが止まってしまえば、仏教の教えの長い歴史の歩みは私のところで止まってしまうわけです。そうではなく、歴史を受け止め、また次なる人へと、こういうことですね。

「(9)生涯、菩薩の道を歩みぬく。」しばらくの間だけやっていくのではなく、生涯を通してやっていく。生涯継続できて初めて本物なんでしょう。途中でやめた場合、やめてその次にすることが一番したいことだったのかもしれない。一時的なものでは、自分の真の願いになっていたのかどうか分かりません。

別の経典に出るのですが、生涯、菩薩の歩みをやっていく時の一番のポイントのようなものが言われる場合があります。「法は電影の如しと知れども菩薩の道を^{くきょう}究竟すと。」この法というのは、この世のあらゆるものです。世間の人や事は全て電影の如しと。稲光りが一瞬光ってすぐに消えてしまうように、この世のあらゆるものは、ほんの一瞬だけでうつろいやすいものだ。人々を教化していきと言っても、教えたから教えた通りにその人がなるとは限らないんですね。むしろ、そうでない場合が圧倒的に多いわけです。ある日はしっかりやりますと言うけれども、その次は私はもうやりませんと言うかもしれない。移ろいやすい、動きやすい。電影の如し。これがこの世のあらゆるものの正体なんだと。このことをはっきりと知る、はっきりと知った上で菩薩の道というものを究竟する、最後までやりぬくと。

「(10)仏の力を体得する。」遂に仏の力をいただいていく。最後の問題ですね。

四 出発せしめる我が内なるもの

これらが文殊菩薩の説かれた教えの一端です。善財童子が初めて仏教の教えをこのように聞いていく。そこから童子の出発が始まるわけです。

ここで大切なことがあります。文殊菩薩の教えを聞いて善財童子はどうなったか、何が童子をして出発せしめたか、ということです。実は教えを聞くことによって、童子は初めて自己とは何かを知らされたのです。文殊の教えが自己の内面を初めて照射した。教えによってこれまで思ったこともないような自分自身が、我が内に見えてきたのです。童子の告白のことは、迷い、高慢、愚痴、貪欲、瞋恚、悪魔、貪愛、諂曲、疑惑、邪道、餓鬼、このような言葉で満ち溢れています。自己の内に見えてきた世界ですね。

愚痴というのは真実が分からない心です。愚痴の闇に覆われていた自分であったと。あるいは悪魔を君主としていたような自分であったと。煩惱が魔のような働きをする、そのような自分であった。魔というのは、真実を求めていこうという私の願いを食い潰し奪っていくような心です。また、貪愛に縛られていたと。貪愛は自己中心的な愛、自己中心的な欲ですね。諂曲は、諂い曲げる。自分の諂曲が正しい行を壊し、為すべきことが目の前に示されているのに、いやそんなものは間違いなんだと言ってきたと。このような表現が沢山出てきます。

善財童子は、文殊菩薩から初めて仏法の教えを聞いた。教えというのは、我が内に自分のこれまでの思いでは先ず気づかないような、本当の自分自身というものを照らし出していくわけですね。教えによって照らし出されてみれば、愚痴の闇に覆われていた自分、悪魔を君主としていたような自分、真実を諂い曲げている自分だったというわけです。この自覚が善財童子がこれから道を求めていくための直接的な契機、出発点になっていくわけですね。

童子は教えを聞いて、自分の中にこのような思いが起りました、これが自分だと分かりましたと文殊菩薩に告げるんです。それを聞いて、文殊菩薩はどう答えたか。そこで、善知識を求めて歩いていけ、とすすめるのです。

その時に『疲倦を生じないように』、善知識に会って『厭足を生じないように』、童子は教えを聞いて、自分の中にこのような思いが起りました、これが自分だと

分かりましたと文殊菩薩に告げるんです。それを聞いて、文殊菩薩はどう答えたか。そこで、善知識を求めて歩いていけ、とすすめるのです。

その時に『疲倦を生じないように』、善知識に会って『厭足を生じないように』、『教えに違逆しないように』と注意のようなことを説かれます。疲倦は疲れ飽きるということですね。善知識を求めていく旅が次から次に続いていく中で、次第に疲れが起ってくる。それは容易に想像がつかますね。厭いやになった、もうやめよう、もう飽きたというような思いが起ってくるでしょう。何人善知識を尋ねていっても、結局同じだとか、いろんな思いが起ってきて、疲倦の心が起りやすい。しかし、その心を生じないようにして最後まで善知識を求めて歩み抜いていきなさいと。

厭足は飽き足りてもう十分だという思いですね。たくさんの善知識を尋ねたからもういいという思いにならないように、まだまだ足りないんだから次々に尋ねていけと。さらに善知識の教えに違逆しないように、違わないように、逆らわないようにと。迷い、高慢、愚痴、貪欲など、たとえ内にどんな心があろうとも、疲倦せず、厭足せず、違逆せず、善智識に従って教えをひたすら求め続けていけよ。こう言って文殊菩薩は善財童子を押し出すのです。

五 求道の旅

旅が始まっていきます。何人かの善知識を簡単に見ておきましょう。二番目、三番目、四番目、この三人の善知識がひとかたまりの内容となっているようです。功德雲比丘と、海雲比丘と、善住比丘。

文殊菩薩は功德雲比丘を紹介します。善財童子としては、もっと文殊菩薩から教えを聞きたいと思うんですが、文殊菩薩次なる人への旅を勧めるのです。

功德雲比丘は遙か遠くにいる人です。善財童子は長い旅をしてやっと捜しあて、教えを請います。新たな善知識に出会った時、善財童子が尋ねる決まった言葉があります。次のような問いです。「私は求道心を起こしました。しかし、どのように菩薩の行を学び、どのように菩薩の道を歩めばよいかわかりません。それを教えて下さい」と。非常に謙虚な問いですね。出発をしたんだけど、自分はまだゼロの所にいるんだという感じですね。何にも分かっていませんから、どう

か教えて下さいと。五十三人の善知識を尋ねていく時、全ての善知識にこの問いを発するのです。

この問いが一貫されているところが素晴らしく優れているところだと思います。普通の場合、だんだんと教えを聞いていくんですから、俺もだんだん分かってきたい言う思いになって、どのように菩薩の道を歩めばよいか分かりませんという言葉が発するのになんか抵抗を覚えるようになる。少しは分かってきているのになど。その思いに合わせて問いが変わっていきそうなところですね。ところが善財童子は、まったく変わらないんです。いよいよ初心に帰る、出発点に立帰る、その謙虚さが示されている問い方だと思います。

この問いに対して、それぞれの人々が答えていかれるわけです。功德雲比丘は、仏に帰依することの大切さを教えます。次の海雲比丘は、法に帰依することの大切さを、善住比丘は、僧に帰依することの大切さを教えます。つまり三宝に帰依することの大切さを教えるのです。仏法僧の三宝の世界に立帰っていくということが一番の基本だということを教えるわけでしょう。仏というのは教えを説く仏様、法というのは教えのはたらき、僧はこの仏を通して教えを聞き、法のはたらきを受けて歩む具体的な人ですね。ですから仏法者の集まりというのは、この仏法僧の三宝が成就しているところです。これをサンガ（僧伽）といいますね。先程の文殊菩薩の教えの中に仏の国をつくるということがありましたが、それがサンガをつくるということでしょう。

サンガという世界は、基本は仏法で営まれている場ですから、そこでは仏法のはたらきを受けていくわけです。しかし又、そこから出るとすぐ世間ですから、仏法が忘れられていくかもしれません。ですからまた早いうちに、サンガに帰ると言うわけです。そうしますと、その人自身にだんだんと仏法の力が身について、もうこのサンガに対し、これまでのように依存しなくても大丈夫になってくる。大丈夫どころか、新たな人を誕生させ、さらに今度は、この人を中心に又仲間が出来て、新しいサンガができるかもしれない。細胞が増殖していくようなものですね。

サンガという存在はほんとに大切なものです。新しい人がここへ来ると新しい仏法者が誕生する。具体的なサンガが世間の中に沢山あることがたいへん大事な

ことになってくるんですね。サンガを形成する仏法僧の三宝を最初の三人の善知識が教えるわけです。

五番目の善知識はお医者さんです。この方は五十三人の中でもよく取り上げられる有名な人です。師弟関係の大事なポイントが明らかにされる場所ですね。弥伽^{みか}という医者ですが、皆よりも高い所に上がって説法をされていた。そこへ善財童子が尋ねに行くわけです。「私は求道心を起こしました。しかし、どのように菩薩の行を学び、どのように菩薩の道を歩めばよいかわかりません。教えていただきたい」と、例によって尋ねます。

すると、高い所にいたこの弥伽が「お前は本当にその心をおこしたのか」と再確認をすると、高座から滑り降りて、善財童子に対して弥伽のほうが頭を下げて、「よくぞ、その願いをおこした」と言って童子を賞賛・歓迎するわけです。善財童子は道を求めていこうという求道心をおこした。それによって将来、歩いていて遂に道を得るとすると、それは求道心をおこしたことが因となるわけですね。求道心を因にして、それによって遂に道を得るという果が生じるわけです。そうすると一人の人において、この因の求道心と、果の道を得たということはどっちが大事か。弥伽は求道心のほうを取ったんですね。童子は今まだ歩み始めたばかりだけれど、必ず果を生み出す因である求道心をおこした人として、偉い先生である弥伽自身の方が降りてきて、童子に対して頭を下げたんです。

後に龍樹という人が、「善知識とは何か」という問いに対して、道を求めて訪ねて来た人を我が友、共に道を求めていく友として受け入れることの出来る人、これが善知識だと言いますね。今はその人は出発したばかりで、何にもないような感じだけれども、本当に自分は道を求めたいんだと、その求道心を起したということが一番大事なんだと。そういう願いを起した人を受け入れて共に歩いていく人が善知識なんだと、龍樹はそのように言っています。

そういうことが実際、この物語の中で説かれているわけです。私達はある意味で結果を早く得たいと焦る。けれども大事なことは、この因の方なんだと。善知識の側には、その求道心を何とか起してもらいたいという願いがある。間違いのない因に立つことが出来れば、必ず果に至る。その因はこうなんだということを教えるのが又、善知識だと思えます。そのような善知識が五番目に出てくるわけ

です。

六 善知識を疑う

五十三人の善知識のほとんどの人が善知識らしい人という感じですが、善財童子がこの人が本当に善知識であろうかと疑う人が三人ほど出ます。まず、十番目の善知識、方便命婆羅門という人です。この人が説く教えは、刀が無数に下から突き出ているような刀の山に登って行って、頂上から火が燃え盛っている下の炎の中へ飛び込めと。そうするとあなたは道を得ることができる、という教えを説くんです。それを聞いて童子はこれが本当の善知識かと疑うんですね。

十八番目に満足王という王様が出ます。この王様は何もかも完璧なんですね。国も非常に豊かで、一万人の政治家がおり、一万人の兵隊がいる。政治も軍隊も完璧で、倉庫はいつも一杯である。本当に素晴らしいと童子が思っていると、一つだけ驚くことがあるんですね。それはその国の中で悪い事をした人に刑を与えるわけですが、その刑罰の与え方が物凄く残酷なんです。手を切ったり、足を切ったり、耳をそぎ落としたり、たいへんな罰を与えるんです。何故このような酷いことをするのかと。それを見て童子はあやしむわけです。そのような王様が出てきます。

二十六番目に娑須密多女という女性がでます。大変な美人だそうです。この女性がこともあろうに童子を誘惑するんです。私の誘惑を受け入れたら、あなたは道を得ることができますよと。それで又、童子はこれはあやしいと思うんですね。

この三人の善知識は本当にびっくりするような教えを説く人ですが、三人の上に表われている姿から童子はたいへん大事なことを教えられるんです。方便命婆羅門は火の中に飛び込んだら道を得るという間違っただけを考えを説くわけですね。これは邪見です。満足王は他はいいんだけど、刑罰を与えるところだけはどう狂ったか、怒りを持って残酷な罰を与える。これは瞋恚を表わします。そして娑須密多女は愛欲の世界、人間の貪愛を表わすんですね。

邪見、瞋恚、貪愛、これらは三人の上にある問題点のように見えますが、結局これは童子自身の心なんですね。そういう縁を通して、自分の中に邪見の心、瞋恚の心、貪愛の心があるということに気づくのです。

私たち、普段よくあることですが、あの人は何と愚かなことをやっているのかと、それがよく私に見えたとすれば、それが実は、自分自身も同じ愚かなことをやる人間だということです。他人の愚かさが分かるということは、自分の中にもその愚かさがあるわけですね。初めの内は一方的に自分は善い者、相手は悪い者として批判をするかもしれませんが、結局、第三者の目から見ると同じ人間なんです。だから通じ合うわけです。相手のやっていることが分かるわけです。相手の邪見、瞋恚、貪愛に触れて、我が内なる邪見、瞋恚、貪愛を知らされていくわけですね。この三つの心、まさに、貪欲、瞋恚、愚痴の自己を知らされるわけです。この三大煩悩がいかに根源的で強いものか、それを表わすために、順境の中でなく、逆境の中で気付かそうとしているのかもかもしれません。私たちの人生にも通ずることのように思えます。童子が疑う三人はそういう意味でとても大切な善知識ということですね。

七 善知識の真の意味

最後の五十三番目の善知識が弥勒菩薩です。何故この人をもって最後の善知識とするのかという問題があります。それはですね、弥勒菩薩が善財童子に問うんです。「お前は、これまでずっとたくさんの師を訪ねて来たけれども、お前の本当の善知識は誰か」と。この問いは非常に優れた問いだと思います。しかし、童子は分からないんです。もし答えようとすれば「全部です」と、こう言ってもいいかもしれません。そこで弥勒菩薩が教えます。「一番最初の文殊菩薩がお前の真の善知識なんだぞ」と。そして、お前が聞くべき最後の教えは、もう一度文殊菩薩の所へ帰って文殊菩薩から聞きなさいと、このように説くんです。

もし童子が弥勒菩薩に会わず、真の善知識は誰か知ってるかという問いに会わなかったら、どうであるか。確かにたくさんの善知識には会ったけれども、善知識に会うということの一番大事な意味が分からないままであったのかもかもしれません。善知識に会うということの決定的な意味は、単にこの善知識と私との教え学ぶという相互関係だけかと言うとそうではないんですね。この人が本当の自分の善知識であると言えるということは、善知識の上に真の仏、即ち阿弥陀が現れて、この人を通して阿弥陀に^あ遇うことができたんからなんです。これが決定的な

ことだと思えます。

それはちょうど親鸞聖人にとっての法然上人ですね。法然上人は正にそういう存在だったわけです。親鸞聖人にとっての善導という人もそうですね。だから、法然とか善導という人は、親鸞聖人にとって阿弥陀の世界から現れてくださった方なんですね。そこに真の善知識ということがある。しかし真の善知識という意味は、他の沢山の善知識との間に差をつけるという意味ではありません。あ**遇**うべきものに**遇**うことによって、初めてその方が私の善知識となるんですね。弥勒菩薩が、お前の本当の善知識は文殊菩薩なんだぞと言って、もう一度善財童子をそこへ連れ帰すわけです。

八 自らの責任で仏と会う

文殊菩薩は、自分のところから出発して、^{はるばる}遙々五十三人の善知識を訪ね、再び帰って来た童子を誉めて喜ぶんですね。童子は文殊菩薩に再開して、文殊菩薩から最後の教えを聞きます。その最後の教えが**普賢菩薩**に**遇**う教えなんです。これが大いなる仏の世界、阿弥陀の世界というべきでしょう。童子が普賢菩薩に**遇**うことによって、初めて文殊菩薩が真の善知識になるんですね。「真の」というのはそういう意味です。他の善知識は**偽物の**善知識だったという意味ではもちろんありません。文殊菩薩を通して大いなる仏に**遇**うことができれば、他の善知識達の背後にも大いなる仏がましましたのだということが分かってくるわけです。

もう一つ大事なことがあります。最後に善財童子は文殊菩薩の教えを聞いて普賢菩薩に会いに行く。そこが一応ゴールなんですね。大いなる仏のはたらきを普賢菩薩で表わしているわけです。その時にこのような描写があります。ここに普賢菩薩が住む家があってですね、庭があってその入り口に門がある。ここに文殊菩薩と善財童子がやってきます。門の前で文殊菩薩は止まります。ここからは善財童子がひとりで自分の足で入って行って家の中の普賢菩薩に**遇**うんですね。このところは非常に大事なことが言われている感じがします。

門のところまでは、我々には善知識が必要なんです。しかし最後、**遇**うべきものに**遇**うというこの段階は、自分の足で歩いていくんだということです。もしそうでなくて、最後まで善知識について来てもらって、普賢菩薩の目の前で、童子

よ、この方が普賢菩薩だ、と善知識から言われたんでは、童子は普賢菩薩に出会ったことにならないんですね。最は自分で出会う。そもそも最初の出発の決心をする時も自分で決心をするわけです。遂に最後、出会う時も自分で遇う。善知識ではなく私の責任で大いなる仏に出会っていく。その方を仏と仰いで生きる人生は、私の決断と責任で選び取るわけです。そこに真の自立、主体性の確立があるのではないかと思います。求道はそのようではなければならない。

これが善財童子の五十三人の善知識を訪ねての歩みです。お釈迦様が最初『^{けごんきょう}華嚴経』という経典で説き表わした^{じんじん}深甚の仏教世界の内容を、一人の求道者を立てて説いていくという内容になっています。生涯をあげての歩みというものが言われています。非常に^{おおざっぱ}大雑把な話しになりましたが、今回はここまでにさせていただきます。